

<原著論文>

授業研究の日独共同比較研究

— 広島大学教育方法学研究室・ライプツィヒ大学一般教授学講座間の共同研究報告書 —

宮本 勇一、松田 充、安藤 和久、藤原 由佳
阿蘇真早子、金原 遼、三戸部由幸
澤田 百花、藤井 翔太、明 月、吉田 成章
(広島大学教育方法学研究室)

I 授業研究に関する日独比較共同研究の背景と本稿の目的

広島大学大学院人間社会科学研究科教育方法学研究室（以下、断りのない限り広島大学と略記）は、ドイツ・ライプツィヒ大学中等教育段階一般教授学・学校教育学研究室（Maria Hallitzky 教授ほか）（以下、断りのない限りライプツィヒ大学と略記）と連携し、授業研究（*jugyo kenkyu* – Lesson Study – *Unterrichtsforschung*）のあり方についての異文化比較共同研究を行ってきた。本稿は、これまでの共同研究の経緯をまとめ、成果と展望を明らかにすることが目的である。

本共同研究は、広島大学教育学部が2016年10月にライプツィヒ大学教育学部と締結した学部間交流の一環で行なってきたものである（資料3参照）。学校現場・授業実践との密接な関連を持って開発的な研究を進めてきた広島大学と、質的研究方法論に基づいて実証的な授業分析を進めてきたライプツィヒ大学のそれぞれの授業研究への取り組み方の共通性と差異を類比・対比させることで、授業研究が捉えることのできる学術的・実践的な射程を明らかにすること、およびこれらの共通の枠組みの構築を通して国際的な授業研究のプラットフォーム形成に寄与することを最終的な目的としてきた。

日本の授業に世界的な関心が集められてより（Stigler & Hiebert 1999）、はや4半世紀が経とうとしている。その間、日本の授業研究（*jugyo kenkyu*）は、レッスン・スタディ（Lesson Study）として世界的に受容されていき（cf. Lewis & Hurd 2011）、世界授業研究学会（World Association of Lesson Studies: WALs）の設立と年次大会の開催（2007年以後）もあいまって、授業実践の開発と省察を軸とした教師教育の有効な枠組みとして広がりを見せている（Kim et al. 2021）。

ひるがえって、日本国内の授業研究に土着の思想的背景や日本の学校・教師の文化的文脈は世界的展開の中で必ずしもそのまま受容されていくことにはならなかった。戦後日本の授業研究の展開の中で、広島大学は、学習集団論を軸として、1962-1985年にかけて五大学授業研究会の一構成団体として北海道大学、東京大学、名古屋大学、神戸大学の教育方法学・教授学研究室と連携共同しながら授業研究運動をけん引してきた（松田・松尾・佐藤 2016参照）。生活綴方運動にもみられるような学校・教師からの草の根の運動に結び付きながら、理論と実践の密接な往還を志向する授業研究の思想的・文化的土壌は、日本学界からの国際的な発信（日本教育方法学会編 2009：NASEM2011）を経てもなお、効果検証と実証性を重

視する国際的な学術研究枠組みの中に根付くまでに至らず、日本の授業研究が国際的なレッスン・スタディの動向については国際的な教育学研究の中でどのような意味や位置づけを得うるかについてはいまだ大幅な検討の余地を残してきている。

他方で、「日本型教育の海外展開」の典型として国際的に効果を発揮しているレッスン・スタディに顕著な関心を示さずに独自の授業研究を展開してきたのがドイツである。ドイツにおける授業研究（*Unterrichtsforschung*）は一同じく日本型教育の海外展開の端緒ともなった—TIMSSの授業ビデオ比較調査に対して、日本型教育の「神話」をむしろ相対化し、授業及び授業ビデオの分析方法にこそ焦点を合わせるべきことが提起され、質的・量的調査手法に基づく実証的な授業分析の研究方法論の探究が交流を迎えることとなったのである（吉田 2019、107 頁参照）。

本共同研究プロジェクトを開始するにあたって、それぞれの文脈の中で醸成され、未だ国際的な授業研究の議論の中に露出されてこなかった多くの学術的特質は、異文化比較交流の端緒として同プロジェクトにおいて着目されるにいたった。日独双方の学術文化・教育文化の共通性と差異を踏まえた上で、それぞれの授業研究（*jugyo kenkyu*—*Unterrichtsforschung*）の持つ強みと課題はどのように見いだされ、どのように相互の枠組みに寄与しうるか。さらにはそうした異文化比較共同研究自体が、国際的な授業研究（*Lesson Studies*）の展開の中でどのような位置づけを得うるか。このような問いをもとに広島大学とライプツィヒ大学の授業研究における比較共同研究が立ち上げられた。

次節にてまずこれまでの研究プロジェクトの経緯を整理し、続けて研究成果について検討し、今後の研究課題を 2021 年度より開始された二国間共同事業における研究展望に代えて指摘する。

II 広島大学—ライプツィヒ大学における授業研究の比較共同研究の経緯

1. 共同研究の推移

共同研究は 2016 年の部局間交流協定に端を発する。同協定以後、両大学の研究者が日本とドイツを相互に訪れ、各地の学校を参観・授業分析を交流しあい、国際学会での発表を重ねてきた。①個別化と共同化を視点とした授業分析の交流（2016.11-2018.11）、②研究方法論、異文化間・異職種協働（*intercultural, interprofessional*）を鍵概念とした研究交流（2019.02-2021.03）③「民主的な授業づくり」に着目して議論する時期（2021.04-現在）というように同事業の取り組みと進展を区分することができる。

① 個別化と共同化を視点とした授業分析の交流（2016.11-2018.11）

日本の小学校の授業の観察と分析（2016.11-2017.11）

2016 年 10 月の共同交流協定締結後、11 月 24 日、広島県内の M 小学校に、大阪教育大学に在外研究に来ていたライプツィヒ大学の Johanna Leicht 氏とともに授業参観を行った。3 年生の理科で 2 つの豆電球が点灯する回路の実験を行う授業であった。同授業の記録を広島大学の慣例の方法で収集・整理を行い、翻訳を施したうえでライプツィヒ大学に送り、それぞれの分析を進めた。

共同研究の端緒として、手始めに授業における個別化と共同化（*Individualization and Collectivization*）を視点としたうえで、分析過程はそれぞれの方法で相互干渉なく施すこ

ととし、結果をそれぞれが発表する形となった。両者の分析結果は、2017年8月28日のライプツィヒ大学でのワークショップにて意見交換を行ったうえで、同年11月25日名古屋大学で開催されたWALSの一般部会にて「Individualism and Collectivism in Classes: Comparative Analysis of Lessons in Germany and Japan」というタイトルで発表された。

ドイツのギムナジウムの授業の分析（2017.12-2018.11）

M小学校の実践記録の分析と交流ののち、ドイツの授業の分析に移行した。同授業は共同研究プロジェクトに先行する2016年4月28日にライプツィヒ市内のギムナジウムにて収録された、K教諭による文学の授業実践である。ファウスト悲劇第一部の後半の授業とシラーのマリア・スチュアルトの二つの授業が、ライプツィヒ大学における慣例的方法で収録・記録された。ライプツィヒ大学にてドイツ語が英語に翻訳されており広島大学には2017年12月に両記録が共有された。

分析の結果が2018年9月11日、フレンスブルク大学で開催されたドイツ教育学会学校教育・教授学部門の大会にて、「Übersetzungsverhältnisse: Praktiken der Individualisierung und Vergemeinschaftung in transkulturellen Perspektivierungen」という部会で「(Re-)Konstruktion der Unterrichtsstruktur durch die Analyse der Lehrer-Fragestellung im Unterricht: oder das Spannungsfeld von Individualisierung und Vergemeinschaftung」というタイトルで、続けて同年11月25日、北京師範大学で開催された世界授業研究学会にて「Teacher Questions in the Context of Individualization and Collectivization in Lessons: Intercultural Dialogue on Methodology of Case Reconstruction between Germany and Japan」というタイトルで発表された。

② 研究方法論、異文化間・異職種協働を鍵概念とした研究交流（2019.02-2021.03）

日本の小学校とドイツのギムナジウムの授業分析を通して、次第に両者の授業研究の方法論の違いが見えてくるようになった。それは研究・教育・教員養成などの様々な次元での文化の差異との関連でとらえられるのではないかということ、特に日本とドイツの授業研究の違いには研究職と教員職という専門職の横断のあり方の違いにとりわけ如実に表れているのではないかということが浮かび上がってきた。2018年以後の研究交流では、研究方法論、異文化間・専門職等を鍵概念とするようになり、日本の高等学校の授業分析をはじめ、人的移動をより活発化させることで文化交流を深めていくことが企図された。

吉田成章准教授のライプツィヒ大学滞在（2019.02.20-11.28）

平成30～32（2018-2020）年度科学研究費補助金（国際共同研究加速基金（国際共同研究強化））「コンピテンシー志向の授業づくりに関する日独比較国際研究」（課題番号：17KK0050）の支援を受け、吉田成章がライプツィヒ大学に客員研究員として滞在了。ドイツでライプツィヒ大学の授業研究の進め方を批判的に検討交流することを目指しつつ、日本型の授業研究の展開可能性を模索した。

Ch. Kieries氏を招いての異職種協働の授業研究の試み（2019.02-2019.09）

吉田の滞在中、ドイツにおける異職種協働の授業研究が志向された。Christine Kieries氏に広島・ライプツィヒ両方の分析結果を提示し、どのように吉田が受け止めたのかを記録し、ドイツにおける異職種協働の授業研究が試みられた。

同取り組みの成果は、2019年8月30日のライプツィヒでのワークショップにおける準備を経て、2019年9月5日にアムステルダムで開催された世界授業研究学会にて「Bridging Gaps between Teachers and Researchers in Interprofessional and Intercultural Lesson Study」というワークショップを開催し、「Are Students Questioned, or Questioning?: Analysis and Results by Hiroshima University」というタイトルで発表された。

日本の高等学校の授業の観察と分析 (2018.11-2019.09)

K教諭との共同に先駆けて、2018年11月のライプツィヒ大学の広島訪問に合わせて新しい授業記録がとられた。広島県立N高校のI教諭による2年生の英語の実践である。教科書教材「Rude Japanese」の作者に手紙を送る授業である。同実践は2018年11月29日に、Maria Hallitzky教授ら数名を迎えて行われた。広島大学の慣例的手法でデータ収集がなされ、英語の翻訳をつけてライプツィヒ大学に資料が共有された。

同授業もまた、異職種協働という側面から、I教諭との共同構成的な授業づくりに光が当てられ、それを日本の授業研究の文化として、2019年9月9-13日、マプート教育大学にて開催されたシンポジウム「Qualitative Approaches to Teaching Research and Development in International Discourses」にて、「Lesson Study in Japan」というタイトルで発表され、ワークショップ型で日本の授業研究が行われた。

同シンポジウムの成果は、Julius Klinkhardt社より『Dependency on location and extension of horizons: Challenges for Qualitative Teaching Research and Development in International Contexts』というタイトルで書籍にまとめられる予定である。

クリンクハルト社からの出版 (2020.01-)

これまでの研究交流の到達点がJulius Klinkhardt社より『Unterrichtsforschung und Unterrichtspraxis im Gespräch: Interkulturelle und interprofessionelle Perspektiven auf eine Unterrichtsstunde』というタイトルで書籍にまとめられることとなった。とりわけ学校と直接的に共同開発的な志向性を持たないドイツにおいて、K教諭を交えて研究者と教師が授業の分析と省察を共同して行ったことが、日独両大学および実践者の三者よりメタリフレクションされ、異職種協働の授業研究の異文化間での試みの可能性と課題が論じられている。

また、これまでの研究成果について、「Grenzbearbeitungen zwischen Erziehungswissenschaft, Politik und Gesellschaft Digitale Veranstaltung」と題された、ドイツ教育学会の異文化・国際比較教育学部門のシンポジウム(ドルトムント工科大学主催、オンライン開催)にて、「Gemeinsame Grenzen. Perspektiven auf Unterricht aus Hiroshima und Leipzig」というタイトルのパネルディスカッションを行った。

③ 「民主的な授業づくり」に着目した二国間共同事業の推進 (2021.04-)

以上の研究交流の成果が認められ、2021年度より、日本学術振興会・二国間共同事業(JSPS—DAAD)に採択され、共同研究の新しいステージを踏むこととなり、民主的な授業づくりを共通のテーマとすることとなった。

同プロジェクトのキックオフとして、3月15日に打ち合わせを行い、両国の教育実践・教育研究史における民主的な授業づくりについてプレゼンテーションを行った。

2. 共同研究で焦点のあてられた授業

①広島県東広島市 M 小学校：N 教諭

授業日：2016年11月24日

理科：明かりをつけよう

第三学年 25人（女子12 男子13）

参与観察者：吉田成章・早川知宏・宮本勇一・Johanna Leicht ほか広島大学院生

授業分析のために収集された資料：指導案・授業ビデオ・録音音声・トランスクリプト（日英）・座席表・写真（板書・生徒の作品のホワイトボード）・フィールドノート

分析結果の概要：広島大学側の分析は同授業の分節化をはじめに行ったうえで、特に実験結果から科学的成果を確認しあう最後の場面に着目をした。回路の成立と不成立についての予想・実験結果・考察を述べる各班の発表を他班が「いいです」というように同意や質問を重ねることで班の論証を真として確かめる「科学的共同体」の形成過程とそれにむけた教師の指導性を確認した。ライプツィヒ大学は、ビデオのセグメンテーション（分節化）を行ったうえで、選ばれたシーケンスにおける被写体の相互行為に着目して分析を行った。結果、教師の特色ある役割が際立っていたことを見出し、班ごとの活動を見守る「パトロール」としての教師の役割を析出した（図1）



図1 ライプツィヒ大学側の分析結果

②ライプツィヒ市内 T ギムナジウム：K 教諭

授業日：2016年4月28日

国語：マリア・ストゥアルト

第11学年 11人（女子0 男子11）

参与観察者：なし

授業分析のために収集された資料：授業ビデオ（前方・後方）・トランスクリプト（独英）・授業全体のシーケンス表

分析結果の概要：広島大学は同授業の教師の発言に着目し、発問が授業における生徒の個別思考と集団思考をどのように組織化しているかについての検討を行った。授業の進

行に沿って、生徒—教師のやり取りから、生徒同士の発言がどのように絡み合い、発展していったのかについての分析がなされた(図2)。

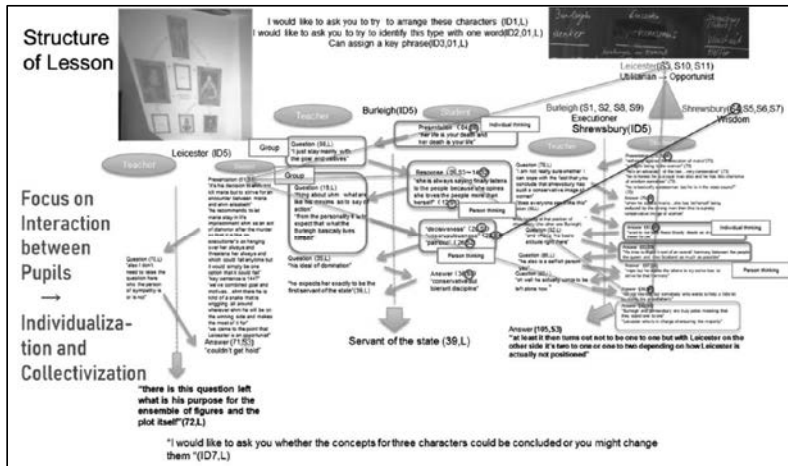


図2 広島大学の授業分析

ライプツィヒ大学はトランスクリプトから教師のアンビバレントな役割に着目した。一方では生徒たちの意見で議論を展開することにゆだねつつも、他方では教師の考える到達してほしい理解へと指導性を発揮する場面があったことから、生徒たちの議論共同体の内側と外側の往来についての分析を行った。

同授業の分析には授業者のK教諭も参与し、両授業の分析結果を受けてのリフレクションをまとめた。

③広島県立N高等学校：I教諭

授業日：2018年11月29日

英語：Let's write a letter to Mr. Heatherly

第三学年 28人(女子16 男子12)

参与観察者：吉田成章・佐藤雄一郎・宮本勇一・松浦明日香・山根万里佳ほか広島大学学部生・Simone Reinhold・Maria Hallitzky・Susanne Viernickel・Almut Krapf・Emi Kinoshita・Stephan Weser・Karla Spendrin・Gereon Eulitz

授業分析のために収集された資料：指導案・授業ビデオ(前方・後方)・トランスクリプト(日英)・座席表・写真(板書)・生徒の成果物(手紙) 全員分・同校の紀要・各学生のルーブリック評価・後日届けられた Heatherly 氏の返信

分析結果の概要：広島大学は本授業単体の分析というよりも、授業研究において重視されてきた学校との共同的な授業づくりの過程について同校の実践を手掛かりに紹介・提案することとなった。吉田が同校と数年にわたって続けてきた、パフォーマンス評価に基づく授業づくりと教師協働の学校づくりの過程に同授業実践を位置づけた。同授業の分析を、広島大学における講義で扱うことで、授業研究を教師教育にも接続しうること

を提案した。

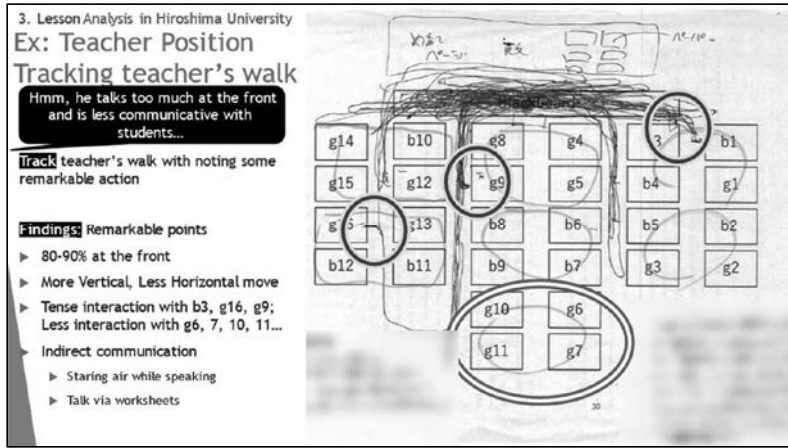


図3 広島大学の授業分析

ライプツィヒ大学は、広島大学から与えられた諸データのうち、ビデオとトランスクリプトに焦点化し、セグメンテーションとシーケンス分析を施して、教師が生徒に対して述べる「すみません（独：Entschuldigung）」という言葉に着目し、指導的立場にある教師の生徒に対する特質ある関係について分析した。

なおこのほかにも両大学からは、ライプツィヒの学校でのゲーテ「ファウスト」のドイツ語の授業、広島県内T小学校のA教諭による国語「たずねびと」の実践などが提供された。

3. 関連事業・付随的イベント

比較共同研究は、両大学の授業分析の手法の紹介と交流を軸としながら、諸機関・イベントと連動しながら活動を展開してきた。一つ目は、質的研究方法論に関する国際会議、二つ目は広島大学教育ヴィジョン研究センターEVRI主催の広島大学研究力強化事業、三つ目は、広島大学の学部・大学院における教師教育への接続である。

2018年9月モザンビーク・マプート教育大学で開催された Qualitative Approaches to Teaching Research and Development in International Discourse: Disconcertment and Convergence International Conference にて、質的教育研究の諸アプローチの交流の目的の下、吉田と宮本勇一が授業研究の研究方法論の発表とワークショップを担当した。2021年内にライプツィヒ大学 Maria Hallitzky 教授・マプート教育大学 Felix Mulhanga 教授・吉田を編著とする書籍を刊行する予定である。

2018年11月28日、広島大学教育ヴィジョン研究センター（EVRI）フォーラム(9)「授業記録に基づく授業の解釈—授業分析の研究方法論を問う—」にて客観的解釈学の手法のワークショップを開催した。（Maria Hallitzky, Emi Kinoshita, Stephan Weser, Gereon Eulitz, KalraSpendrin が登壇）

2020年3月9日、広島大学大学院「教育方法学演習」および学部「教育学研究法演習Ⅱ」に、ライプツィヒ大学 Hallitzky 教授らを招いて交流会を持った。日本とドイツの質的研究方法論の違いについての交流を持った。

Ⅲ 共同研究の成果

これまでの共同研究を通して、広島大学における授業研究 (*jugyo kenkyu*) とライプツィヒ大学における授業研究 (*Unterrichtsforschung*) の異同が明らかになり、同時に異文化間での共同授業研究のために取り組むべきカギとなる論点が析出され、異文化間授業研究の共通プラットフォームづくりの基礎を形成することができた。

1. 4つのフェーズと日独授業研究の特質

まず、これまでの共同研究の過程を通して確認されてきた授業分析の進め方の枠組みとして4つのフェーズが浮かび上がった。分析のための資料を収集する「Documentation」段階、資料を言語化させる「Transcription」段階、資料に基づいて分析を加える「Analysis」段階、そして分析の結果を実践者や学術の場へと還元していく「Feedback」段階である。この4つは大まかに合意されうる授業分析・授業研究のプロセデュアとなっている(表1)。

| | Hiroshima, Japan | Leipzig, Germany |
|---------------|--|--|
| Documentation | 2 Videos, IC-Recorder, etc. Get involved in classroom | 2 Videos Distance oneself from classroom |
| Transcription | Speech, action interactional structure | Speech, action, time lag sequential structure |
| Analysis | Interpretative structure of interaction | Interpretative videography |
| Feedback | Academic < Practical | Academic > Practical |

表1 広島大学とライプツィヒ大学の比較共同研究の比較対照表
(初出: Yoshida, Matsuda, Miyamoto 2021)

これら4つのフェーズではそれぞれが異なるアプローチを有していることが明らかになった。Documentation の段階で広島大学は、対象実践の文脈を集められる限り集めていくホリスティックなアプローチを採用している。とりわけI教諭実践での資料収集に見られるように、すでに当該分析対象の実践が行われる前から同実践の構築に取り組み、文脈を共有し、データをとおしてその文脈が再現されることが目指されているとあってよい。他方でライプツィヒ大学ではビデオだけに絞られており、教師の名前も子ども一人一人の情報も分析段階の初めから匿名化された形で収集がなされている。

これに続けて、処理段階となる Transcription では、広島大学は上述の諸データをもとに声と行為の文字上の再現を試みている。他方でライプツィヒ大学は、ビデオで聞こえてくる情報を文字化するシンプルなトランスクリプトを行っている。

この時着目に値するのが、両大学のトランスクリプトの構造(資料2)である。広島大学は教師と生徒のカラムが二列に並行して並んで時間軸の中で進行するようにできている。ライプツィヒ大学は、時間の進行を軸に発言者を並べていくものとなっている。広島大学で

は非文字情報を文字化する際の処理として、教師と生徒の対照関係—相互作用関係—が念頭に置かれており、ライブツィヒ大学は授業の進行を時間の進行という軸に合わせて処理するという発想の違いがここですでに読み取ることができる。

Transcription はトランスクリプトの作成を中心しつつ、補足情報も文字化されるように整えられている。広島大学では例えば座席表や、生徒の授業後の感想などである。

Analysis—分析の段階では、どちらも解釈的・質的手法であることは共通であるがその具体的なアプローチの方法にはまた差異が認められる。広島大学は教師生徒の相互作用関係の構造を様々な観点から読み解こうとしていた。M 小学校ではトランスクリプトを軸としながら生徒の思考に教師がどのように入り込もうとしているか、Tギムナジウムでは、発問を手掛かりとしながら教師の働きかけによる生徒の思考の組み立ての過程を、最後にN高校では、例えば机間指導の様子から、教師がどの生徒とどのようにかかわろうとしたのかについて分析を施した。総じて広島大学のアプローチは、観察した授業の文脈から読み取ることのできる問題や問いを扱おうとするようなアプローチとも読み取ることができる。ライブツィヒ大学の授業分析のアプローチは、ビデオグラフィーという手法に基づいていることが紹介された。

Feedback の段階では、授業分析の成果をどこに還元するのかに関する差異が見られた。広島大学は、実践的なかわりを持って授業研究を進めることから、フィードバックは実践者である教師や学校に直接返すことを前提としている。ライブツィヒ大学は、授業分析の結果はむしろ学会への論文として発表される。このように授業研究の成果が異なる方向を志向していることがあきらかとなった。

2. 4つのフェーズの移行を支える議論の論点

上述の4つのフェーズからなる授業研究のプロセスでは、各段階に広島大学とライブツィヒ大学間の規範的志向性の差異が認められた。こうした差異を文化的な差異ととらえたうえでどのように架橋していくことができるのかというのが常なる課題として、日独比較共同研究における焦眉の点となっていた。

そのうえで、複数回の共同授業分析を通して、異文化対話上の「**焦点となる問い**」があることが浮かび上がってきた。その焦点となる問いが各フェーズにおける対話を深化・促進する契機となっていたことが明らかとなった（図4）。

Documentation から Transcription への移行にかけて問題とされたのは、「どのようなデータをどのような規範的要請のもとで収集・整理するのか」という**データと文化の共有**に関する問いである。これについての議論をお互いにかかわすことで、それぞれの文化規範をとらえ、その後の授業分析の円滑な進行を可能とすることとなった。これを除くと、得られたデータの共有が分析不能となり、異文化共同研究上のコミュニケーションに支障が出ることとなる。その意味でも資料整理の段階となる端緒において、お互いの授業分析の進め方を実践的に確かめていくことが重要である

分析対象となる資料が Transcription を通して整えたのち、続いては分析に移行することとなる。ここでは「どのような研究方法論や分析の過程を行うのか」という、**研究方法論の明確化**が向けられるように仕掛けられた。ここにおいて広島大学とライブツィヒ大学は双方の理解に大きな支障をきたしていたということが出来る。広島大学側は、ライブツィヒ大学

の研究方法論を理解することに困難を覚え、ライプツィヒ大学は広島大学があるデータから導いた結論に解釈の飛躍を感じ、意思疎通がうまくはかられないことが多くあった。資料から分析を推し進める際に、合意可能なもの、両者にとって（差異があれども）理解が可能だというような受けとめを可能にするためには、この研究方法論に関する綿密な話題提供と継続的議論を要する。

最後に、「分析結果をどのように社会や学術世界に還元するか」という**研究の問いと結果への応答**が挙げられる。これについては、比較共同研究という目的上、国際学会を第一とすることはほぼ自明ともいえる。しかしながら、それと同時に、比較共同研究が、それぞれの大学の授業研究の文脈に新しい知見をもたらす可能性を有していることから、国内学会等にて成果を還元していくことも重要な取り組みとして理解された。加えて、還元先の候補として分析対象とされた授業の教師へのフィードバックが考えられる。これは従来日本でしか行われてこなかった教員へのフィードバックを、ドイツの K 教諭にも試みるということで、本共同研究がドイツの授業研究の発展文脈の中で果たせた一つの大きな成果といえることができる。

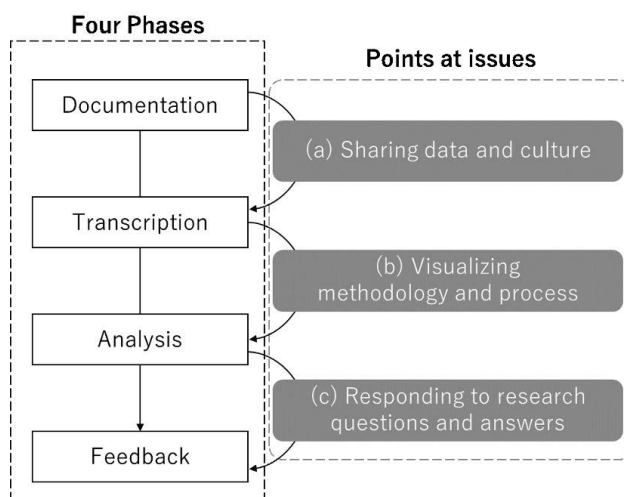


図4 異文化間授業分析のフェーズと議論の焦点
(初出：Yoshida, Matsuda, Miyamoto 2021 (12))

IV 研究の展望

jugyo kenkyu と *Unterrichtsforschung* としての授業研究は、今後もさらなる緊密な連絡協働を図ることによって相互に有益な学術的・実践的展開を図ることができよう。第一に、ドイツの授業研究文脈においては、K 教諭への授業分析結果のフィードバックとそこから展開される大学と学校との協働で確かめられてきた、授業研究と教師教育あるいは学校教育実践との接点がさらに模索されてしかるべきである。すでに歴史的・伝統的・文化的な背景を有し、世界的に展開される日本のレッスン・スタディを、研究者と実践家との協働関係のもとでの教師教育実践として海外展開していくことの可能性はドイツ語圏の文脈においても十分に認めることができる。他方で、授業研究をドイツ語圏をも含めた国際的な研究文脈に

において展開していくためには、研究方法論を明示しうる教育学研究として授業研究を確立することが重要な課題として浮上してくる。その点はドイツの *Unterrichtsforschung* としての授業研究に日本の授業研究が学ぶところが多い。

とりわけ日本の授業研究を国際的な水準へと視野を合わせていくにあたって以下の二点への注意深い省察が要請されている（吉田 2019）。すなわち、教育研究と教育実践における「エビデンス」を巡る問題と沿いながら、授業研究での議論がどのようなエビデンスのもとで語られているのかについての省察を加えることであり、そしてまた第二にそうしたエビデンスの使用が必然的に呼び込む学術的言明の背景の規範性への省察である。

これに加えて、共同研究を経て浮かび上がっている実践的課題は、第一に日独間の対称的関係の構築へのさらなる努力である。それは一つには言語の問題に表れ、もう一つには構成員の発言バランスに表れている。言語はこれまでなぜかドイツ語で行われてきたこと、ライプツィヒ大学は構成員それぞれが発言するのに対し、広島大学は構成員全員で一つの見解として対話がなされていたという現象を、異文化間交流上の前提ともなる「対称的關係」としてとらえられるかどうかという問題が残されていた。この点は 2021 年度に入り、広島大学側にも通訳を置くことで大きく改善を図っているところである。共同研究の中での異文化間交流をどのようにデザインするかという点でこの組織的整備は重要な問題である。

これに加えて、これまでの共同分析の交流をより活発に行う方途を模索することが課題として挙げられる。これまでは共同分析という名のもと、それぞれが分析を行って発表するという並行的な関係がより強かった。今後は、例えばまずは対象となる授業実践レベル（Documentation→Transcription の移行次元）での協働と混合—同一教材の日独授業の分析や、教師を日独で入れ替えての授業実践の試み、あるいは日独以外の授業の分析など—を、そしてまた核となる授業分析レベル（Transcription→Analysis の移行次元）でのより緊密な協働と混合を、さらには分析結果の還元方法レベル（Analysis→Feedback）におけるより緊密な協働と混合—双方の大学の講義への参与を通じた授業研究と教師教育の結合や、教師の参与や学際的な研究交流といった実証的・実践的交流の活性化など—を進めていくことが今後二国間共同研究交流の中で展望として開かれている。

最後に、本共同研究の成果から見えてきたより喫緊もちろん、広島大学の具体的課題は、むしろより根深いところにある。すなわち学習集団論という広島大学における授業研究の思想的基盤を国際的な文脈の中でどのように位置づけ、発信していくかという問題である。1970 年以後の日本に特有の学術的、実践的文脈を捨象することなく国際的な教育研究の中で理解されうるアプローチとして語りうるか、ということが、今後の日独比較研究の中でも引き続き中心の問題となるだろう。むしろ日独の国際比較共同研究の文化交流の成果が、研究方法論レベルでの交流にとどまるのであれば、それはその背景に息づく両大学の思想的な対峙とはなりえない皮相的なものにとどまってしまうことを意味する。日独双方において「他なるもの」と映っている思想的次元での対話を可能にすることができるかどうか、共同研究の真価が問われているように思われる。

【文献】

- Yoshida, N., Matsuo, N., Matsuda, M., & Sato, Y. (2018). Analysis and Interpretation of lessons with the Collaboration between University and School: Historical approach to the Lesson Study in Japan and a Case Study for the integrated perspectives, 広島大学大学院教育学研究科紀要. 第三部, 教育人間科学関連領域, 67 巻, pp. 27-36.
- Stigler, J.W. and Hiebert, J. (1999), *The Teaching Gap: Best Ideas from the World's Teachers for Improving Education in the Classroom*, Free Press.
- Lewis, C. and Hurd, J. (2011), *Lesson Study Step by Step: How Teacher Learning Communities Improve Instruction*, Heinemann.
- 松田充・佐藤雄一郎・松尾奈美 (2016) 「日本における授業研究の展開：「日本版教授学モデル」として」ハンナ・キーパー、吉田成章編『教授学と心理学の対話：これからの授業論入門』溪水社、47-57 頁。
- 日本教育方法学会編 (2009) 『日本の授業研究 上・下巻』溪水社。
- National Association for the Study of Educational Methods (NASEM) (ed.) (2011), *Lesson Study in Japan*. Keisuisha.

【資料 1】これまでの共同研究関連の研究業績

1. Nariakira Yoshida, Tomohiro Hayakawa, Yuichi Miyamoto (2017) Curriculum Analysis on 3rd grade Science Class of Elementary school in Japan. International Symposium for Educational Studies in Japan and Leipzig. Leipzig Universität. Oral Presentation. 2021.08.
2. Nariakira Yoshida, Maria Hallitzky, Christian Herfter, Emi Kinoshita, Johanna Leicht, Karla Spendrin, Tomohiro Hayakawa, Yuichi Miyamoto (2017) Individualism and Collectivism in Classes: Comparative Analysis of Lessons in Germany and Japan. The World Association of Lesson Studies, Nagoya University. Oral Presentation. 2017.11.25.
3. Nariakira Yoshida, Mitsuru Matsuda, Tomohiro Hayakawa, Yuichi Miyamoto, Asuka Matsuura, Marika Yamane, Kazuhisa Ando (2018) (Re-)Konstruktion der Unterrichtsstruktur durch die Analyse der Lehrer-Fragestellung im Unterricht: oder das Spannungsfeld von Individualisierung und Vergemeinschaftung. Jahrestagung der Kommission Schulforschung und Didaktik, DGfE (Deutsche Gesellschaft für Erziehungswissenschaft). Europa-Universität Flensburg. Oral Presentation. 2018.09.11.
4. Maria Hallitzky, Nariakira Yoshida, Tomohiro Hayakawa, Yuichi Miyamoto, Asuka Matsuura, Marika Yamane, Kazuhisa Ando, Emi Kinoshita, Christian Herfter, Stephan Weser, Gereon Eulitz, Johanna Leicht, Karla Spendrin, Teacher Questions in the Context of Individualization and Collectivization in Lessons: Intercultural Dialogue on Methodology of Case Reconstruction between Germany and Japan. World Association of Lesson Studies. Beijing Normal University. Oral Presentation. 2018.11.25.
5. EVRI フォーラム(9)「授業記録に基づく授業の解釈—授業分析の研究方法を問う—」(Hallitzky, Kinoshita, Weser, Eulitz, Spendrin) Symposium/Forum
6. 草原和博・吉田成章編(早川知宏・宮本勇一・松浦明日香・山根万里佳・安藤和久協力) (2018) 『授業記録に基づく授業の解釈—授業分析の研究方法を問う—』教育ヴィジ

ョン研究センター。

7. Bridging gaps between teachers and researchers in interprofessional and intercultural Lesson Study. World Association of Lesson Studies. Roundtable. Johan Cruijff ArenA. 2019.09.05.
8. Qualitative Approaches to Teaching Research and Development in International Discourse: Disconccertment and Convergence. Maputo, Mozambique (Universidade Pedagogica). 2019.09-09-13.
9. Gemeinsame Grenzen. Perspektiven auf Unterricht aus Hiroshima und Leipzig. Jahrestagung der Sektion Interkulturelle und International Vergleichende Erziehungswissenschaft (SIIVE) in der Deutschen Gesellschaft für Erziehungswissenschaft (DGfE) im Frühjahr 2021 an der TU Dortmund zum Thema: Grenzen auflösen – Grenzen ziehen. Grenzbearbeitungen zwischen Erziehungswissenschaft, Politik und Gesellschaft. Digitale Veranstaltung an zwei Tagen. 2021. 02.19, 22.
10. 吉田成章（2019）「ドイツとの授業の比較検討による日本の授業研究の海外展開の可能性と課題」日本教育学会編『教育学研究』第86巻第4号、107-120頁。
11. Nariakira Yoshida, Mitsuru Matsuda, Yuichi Miyamoto (2021) Intercultural Collaborative Lesson Study between Japan and Germany. *International Journal of Lesson and Learning Studies*, 10 (3), 245-259. DOI 10.1108/IJLLS-07-2020-0045
12. Maria Hallitzky, Christine Kieres, Emi Kinoshita, Nariakira Yoshida (Hrsg.) (2021): *Unterrichtsforschung und Unterrichtspraxis im Gespräch: Interkulturelle und interprofessionelle Perspektiven auf eine Unterrichtsstunde*. Julius Klinkhardt.
13. Maria Hallitzky, Felix Mulhanga, Nariakira Yoshida (eds.) (2021) *Dependency on location and extension of horizons: Challenges for Qualitative Teaching Research and Development in International Contexts*. Julius Klinkhardt.
14. Jongsung Kim, Nariakira Yoshida, Shotaro Iwata, Hiromi Kawaguchi (eds.) (2021) *Lesson Study based Teacher Education: The Potential of the Japanese Approach in Global Settings*. Routledge.

【資料2】 広島大学・ライブツィヒ大学それぞれのトランスクリプトサンプル

| | | | |
|------------|--|-------|---|
| T 50 | (the timer rings) <u>so many of you are working hard. So we take more few minutes.</u> | C 170 | g1 (ndi.) (showing her notebook to b1) |
| T 51 | (to b1) what's happening? | C 171 | b1 (nodding to g1) |
| T 52 | okay, uh, blue or green, yes, like I want to know more like <u>this person or this was a great experience or surprising events or somethings happened.</u> | C 172 | b1 <u>how do I make here?</u> |
| T 53 | ou, the impression of the essay like book report. | C 173 | b1 <u>oh is that the place of such thing?</u> |
| T 54 | letter to write, so you should mention about what she wrote on the paper. | C 174 | b1 <u>ahh (nodding, tilting his head to one side, and making a grin.)</u> |
| T 55 | (standing at side of b1 and pointing at a paper) like you thought this is great or that is impressive and so on. (apart from b1. up to the front) | C 175 | b1 <u>... Y. E. S. (tilt his head to one side)</u> |
| 36:57 T 56 | <u>so, just for this lesson, it's okay what you could have done, one more minutes. I'll give you one more minutes, one more minutes.</u> | C 176 | b1 (looking at the board) |

広島大学のトランスクリプト一部

| | | |
|----|----|---|
| 22 | T | now I capture this in that way (writes on blackboard) (s5 raises hand) it might be\ (points to s5) |
| 23 | s5 | but he is somehow such a little intriguer if one sees- well just leicester\ |
| 24 | T | well leicester stands for utilitarianism for that for the intrigue - (3s) (writes on blackboard) if you want it that way it should be now\ |
| 25 | s4 | (to s3) well done\ |
| 26 | T | is it enough for leicester/ |
| 27 | s6 | yes\ |
| 28 | T | then the other two\ (s3 and s4 raise hands, T picks s3) |
| 29 | s3 | well shrewsbury probably for wisdom and- |
| 30 | s4 | supporter\ (uses english term) |
| 31 | T | (writes on blackboard) are there any further remarks or other suggestions for shrewsbury/ or does wisdom sweep you all off off [the court] here and now- (s3 raises hand, T picks s3) |

ライブツィヒ大学のトランスクリプト一部

【資料3】広島大学教育方法学研究室・ライプツィヒ大学一般教授学講座研究交流

1. 「授業研究」分野での共同研究の展開

○2016年10月3-7日, ライプツィヒ大学一行, 広島訪問

訪問者: Christian Glück, Katrin Liebers, Maria Hallitzky, Johanna Leicht

・10月3日 広島平和記念公園, 厳島神社訪問

・10月4日 広島大学附属幼稚園訪問

・10月5日 11:00-11:25 部局間交流調印式

参加者: Christian Glück, Katrin Liebers, Maria Hallitzky, Johanna Leicht,
小山正孝, 丸山恭司, 山元隆春, 仁科陽子, 吉田成章, 島津礼子, 高田和子,
安宅純子

14:30-17:00 シンポジウム開催

参加者: 小山正孝, 丸山恭司, 仁科陽子, 吉田成章, 島津礼子, 高田和子, 安宅純子

・10月6日 10:00-13:00 広島大学附属三原学校園訪問

参加者: Christian Glück, Katrin Liebers, Maria Hallitzky, Johanna Leicht,
吉田成章, 島津礼子, 宮本勇一, 松浦明日香

・10月7日 10:00-12:15 東広島市立三津小学校訪問

○2016年11月24日, 東広島市立三津小学校の研究授業

対象授業: 東広島市立三津小学校 3年1組中間亮太学級 計25名(男子13女子12) 理科「明かりをつけよう」

参加者: Johanna Leicht, 吉田成章, 宮原順寛, 佐藤雄一郎, 早川知宏, 廣中眞由美, 宮本勇一, 松浦明日香, 他数名

記録: ビデオ・発話記録(日本語・英語), 座席表, 指導案, 理科各社教科書, 板書写真, 授業内資料(回路一覧, ホワイトボード), フィールドノート

○2017年8月24-30日, 広島大学一行, ライプツィヒ訪問

訪問者: 丸山恭司, 仁科陽子, 吉田成章, 早川知宏, 宮本勇一

・8月24日 10:00- Einstein der FRÖBEL Kindergarden 訪問

13:15- Reclam-Gymnasium 訪問

参加者: Maria Hallitzky, Katrin Liebers, Susanne Viernickel, Emi Kinoshita,
Johanna Leicht, 仁科陽子, 吉田成章, 早川知宏, 宮本勇一

・8月25日 09:00-12:00 ワークショップ “Analysing a Lesson in School”

参加者: 吉田成章, 早川知宏, 宮本勇一, Maria Hallitzky, Christian Herfter,
Johanna Leicht, Karla Spendrin

タイトル: Individualism and Collectivism in Classes: Analysing Lessons in
Cooperation with School Teachers: Experiences and
Perspectives for an International and Intercultural
Comparative Approach

14:30-16:30 幼児教育に関する研究討議, 学習教材室訪問

参加者: 仁科陽子, 吉田成章, 早川知宏, 宮本勇一, Maria Hallitzky, Katrin Liebers,
Emi Kinoshita, Susanne Viernickel, 他数名

・8月28日 10:00-12:00 幼児教育施設訪問

参加者:吉田成章, 早川知宏, 宮本勇一, Emi Kinoshita, Johanna Leicht, 他数名
14:00-1700 シンポジウム “Education and International Research on School Lessons“

登壇者:Simone Reinhold, Makhabbat Kenzhegaliyeva, Barbara Drinck, Maria Hallitzky,丸山恭司, 吉田成章

タイトル:Lesson Study in Japan und Unterrichtsanalyse in Hiroshima : oder Möglichkeiten des gemeinsamen Forschens von LU und HU

Belief Introduction of School of Education, Hiroshima University

・8月29日 10:00- 部局間交流打ち合わせ

陪席者:丸山恭司, 吉田成章, Schroeeger, Simone Reinhold, Maria Hallitzky, Emi Kinoshita

13:00-15:30 ワークショップ

参加者:吉田成章, 早川知宏, 宮本勇一, Maria Hallitzky, Christian Herfter, Johanna Leicht, Karla Spendrin

タイトル:Individualism and Collectivism in Classes; Comparative Analysis of Lessons in Germany and Japan

○2017年11月25日, WALIS@名古屋大学

参加者:吉田成章, Maria Hallitzky, Christian Herfter, Emi Kinoshita, Johanna Leicht, Karla Spendrin 早川知宏, 宮本勇一

タイトル:Individualism and Collectivism in Classes: Comparative Analysis of Lessons in Germany and Japan

○2017年12月, ドイツ語の授業を分析対象に設定→それぞれに分析

対象授業:Thomas schule ギムナジウム第11学年 Kieres 学級 計11名(男子11女子0)「Maria Stuart」

日付:2016年4月28日

参加者:なし

記録:授業ビデオ(前方・後方)・トランスクリプト(独英)・授業全体のシーケンス表

○2018年1月, 科学研究費補助金(国際共同研究加速基金(国際共同研究強化))「コンピテンシー志向の授業づくりに関する日独比較国際研究」(吉田成章)採択決定

○2018年6月, 広島大学一行, ライプツィヒ訪問

参加者:松見法男, 吉田成章, 他数名

○2018年8月, 二国間共同事業共同申請

タイトル:JSPS「授業記録に基づく開発的・実証的な教育研究としての授業研究に関する日独比較国際研究」DAAD“Transkulturelle Perspektivierungen von Evidenz in qualitativer Unterrichtsforschung und -entwicklung. Ein komplementärer Forschungsdialog zur Individualisierung und Vergemeinschaftung in Deutschland und Japan“

○2018年8月1日-9月28日, 宮本勇ーグリーンウィング奨学金留学

留学先:InterDaf Herder Institut

○2018年9月11日, DGfE@Europa-Universität Flensburg

学会名:Deutsche Gesellschaft für Erziehungswissenschaft

大会名:Jahrestagung der Kommission Schulforschung und Didaktik

部会名:Übersetzungsverhältnisse: Praktiken der Individualisierung und Vergemeinschaftung in transkulturellen Perspektivierungen

参加者:Christian Herfter, Emi Kinoshita, Johanna Leicht, Karla Spendrin, Maria Hallitzky, 吉田成章, 松田充, 早川知宏, 宮本勇一, 松浦明日香, 山根万里佳, 安藤和久

タイトル:(Re-)Konstruktion der Unterrichtsstruktur durch die Analyse der Lehrer-Fragestellung im Unterricht: oder das Spannungsfeld von Individualisierung und Vergemeinschaftung

○2018年11月23-25日, WALS@北京師範大学

タイトル:Teacher Questions in the Context of Individualization and Collectivization in Lessons: Intercultural Dialogue on Methodology of Case Reconstruction between Germany and Japan

参加者:Maria Hallitzky, Gereon Eulitz, Christian Herfter, Emi Kinoshita, Johanna Leicht, Karla Spendrin, 吉田成章, 松田充, 早川知宏, 宮本勇一, 松浦明日香, 山根万里佳, 安藤和久

○2018年11月27日-12月1日, ライプツィヒ大学一行, 広島訪問

訪問者:Maria Hallitzky, Simone Rinehold, Susanne Viernickel, Almut Krapf, Gereon Eulitz, Christian Herfter, Emi Kinoshita, Johanna Leicht, Stephan Weser, Karla Spendrin

- ・2018年11月27日 13:00-15:30 幼児教育分野シンポジウム「今、保育の質を問う」
- ・2018年11月28日 09:00-09:45 岩田昌太郎授業参観「体づくり運動・器械運動」
13:30-15:00 体育科教育学ワークショップ
18:00-20:00 研究拠点創成フォーラム(9):EVRI セミナー「授業記録に基づく授業の解釈:授業分析の研究方法论を問う」

・2018年11月29日 14:55-15:40 日彰館高校訪問

対象授業:広島県立日彰館高等学校 3年 計 28名(男子 12 女子 16) 今中浩二教諭 英語「Let's write a letter to Mr.Heatherly」

参加者:Maria Hallitzky, Simone Rinehold, Susanne Viernickel, Almut Krapf, Gereon Eulitz, Christian Herfter, Emi Kinoshita, Johanna Leicht, Stephan Weser, Karla Spendrin, 吉田成章, 佐藤雄一郎, 宮本勇一, 松浦明日香, 山根万里佳

記録:指導案・授業ビデオ(前方・後方)・トランスクリプト(日英)・座席表・写真(板書)・生徒の成果物(手紙)全員分・同校の紀要・各学生のルーブリック評価・後日届けられた Heatherly 氏の返信

・2018年11月30日 授業分析会

・2018年12月1日 厳島神社、広島平和記念公園訪問

○2019年2月20日-11月28日 吉田成章ライプツィヒ大学在外研究

科学研究費補助金(国際共同研究加速基金(国際共同研究強化))

「コンピテンシー志向の授業づくりに関する日独比較国際研究」

○2019年8月28-30日, 広島大学一行, ライプツィヒ訪問-30日, 広島大学一行, ライプツィヒ訪問

訪問者:丸山恭司, 小山正孝, 草原和博, 七木田敦, 間瀬茂夫, 岩田昌太郎, 吉田成章, 松田充, 渡邊優, 中西さやか, 宮本勇一, 濱本想子, 藤原由佳, 長沼正義

- ・2019年8月28日 10:00-12:00 共同研究「Intercultural Research Dialogue about Normativity in Educational Reseach between Japan and Germany: Focusing on Process of Indivisualization and Collectivization in Lessons」
参加者:吉田成章, 松田充, 宮本勇一, 藤原由佳, 長沼正義, Maria Hallitzky, Gereon Eulitz, Christian Herfter, Emi Kinoshita, Johanna Leicht, Karla Spendrin
- ・2019年8月29日 10:45-11:30 St. Thomas Schule 訪問
参加者:丸山恭司, 小山正孝, 草原和博, 間瀬茂夫, 岩田昌太郎, 吉田成章, 松田充, 中西さやか, 宮本勇一, 藤原由佳, 長沼正義, Maria Hallitzky, Emi Kinoshita, Johanna Leicht, Karla Spendrin, Christine Kieres, 他数名
- ・2019年8月30日 09:00-16:30 ワークショップ
参加者:丸山恭司, 小山正孝, 草原和博, 七木田敦, 間瀬茂夫, 岩田昌太郎, 吉田成章, 松田充, 渡邊優, 中西さやか, 宮本勇一, 濱本想子, 藤原由佳, 長沼正義, Simone Rinehold, Barbara Drinck, Maria Hallitzky, Katrin Liebers, Susanne Viernickel, Nina Ines Bohlmann, Almut Krapf, Christian Herfter, Emi Kinoshita, Gereon Eulitz, Johanna Leicht, Karla Spendrin, Sibylle Reech, Christine Kieres

○2019年9月5日 WALIS@アムステルダム(The Johan Cruijff Arena)

部会名:Workshop: Bridging Gaps between Teachers and Researchers in Interprofessional and Intercultural Lesson Study

タイトル:Scientific Reflections part1: Cultures of Teaching and Learning Based on Videography Analsis. Are Students Ouestioned, or Ouestioning?: Analysis and Results by Hiroshima University

参加者: Maria Hallitzky, Christian Herfter, Emi Kinoshita, Johanna Leicht, Karla Spendrin, Christine Kieres, 吉田成章, 松田充, 宮本勇一, 藤原由佳, 長沼正義

○2019年9月9-13日 質的教育研究シンポジウム@Universidade Pedagogica Maputo

シンポジウム名:Qualitative Approaches to Teaching Research and Development in International Discourses

参加者: Maria Hallitzky, Felix Mulhanga, Jorge Ferrao, Hans Saar, Eugenia Cossa, Carolyn Mckinney, Xolisa Guzula, Karin Braeu, Lara Krause, Nkianianileka mgoeka mgonda,da, Matthatthias Martas Martens, Mamadou Mbaens, Carla Schelle, Ralf Schiededecker, Rwegasha IshemMamado, Adeu Mbaye, Carla Schelle, Ralf Schino Aededecker, Rwegasshane, IsheEmi Kinoshita, Johanna Leicht, Karla Spendrin, Benson Banda, Joyce Kinyanjui, Jose M. Flores, 吉田成章, 宮本勇一

- ・2019年9月9日
テーマ: Perspectives on Challenges of qualitative teaching research
- ・2019年9月10日
テーマ: Ethnographic research and its methodological challenges
- ・2019年9月11日
テーマ: Reconstructive teaching research
- ・2019年9月12日
テーマ: Lesson Studies
- ・2019年9月13日
テーマ: Review and Outlook – Reflecting the International Discourse on Educational Research in a Historical and Sociological Perspective
- ・2019年9月16日 8:00-13:30 ポストカンファレンス
13:00-18:00 学校訪問
- ・2019年9月18日 質的研究ワークショップ

○2020年1月, Julius Klinkhardt 共同出版計画

タイトル:

編者: Maria Hallitzky, Christine Kieres, 吉田成章, Emi Kinoshita

執筆者: Christian Herfter, Johanna Leicht, Karla Spendrin, 松田充, 宮本勇一, 安藤和久, 藤原由佳, 松浦明日香, 明月, 二宮諒, 櫻井瀬里奈

○2020年3月9日 教育方法学演習

参加者: Maria Hallitzky, Emi Kinoshita, 吉田成章, 松田充, 宮本勇一, 安藤和久, 櫻井瀬里奈, 二宮諒, 藤原由佳, 金原遼, 三戸部由幸, 他受講生

○2020年4月-2021年5月27日, Routledge 教師教育のための授業研究 出版

タイトル: Lesson Study based Teacher Education

編者: Jongsung Kim, Nariakira Yoshida, Shotaro Iwata, Hiromi Kawaguchi

○2020年6月-2021年5月20日, IJLLS 投稿

タイトル: Intercultural Collaborative Lesson Study between Japan and Germany

執筆者: 吉田成章, 松田充, 宮本勇一

投稿先: International Journal for Lesson and Learning Studies

○2021年2月22日, SIIVE@ドルトムント工科大学

学会名: Deutschen Gesellschaft für Erziehungswissenschaft (DGfE) 大会名:

Jahrestagung der Sektion Interkulturelle und International

Vergleichende Erziehungswissenschaft (SIIVE) in der Deutschen

Gesellschaft für Erziehungswissenschaft (DGfE) im Frühjahr 2021 an der

TU Dortmund zum Thema: Grenzen auflösen – Grenzen ziehen.

Grenzbearbeitungen zwischen Erziehungswissenschaft, Politik und

Gesellschaft Digitale Veranstaltung

部会名: Gemeinsame Grenzen. Perspektiven auf Unterricht aus Hiroshima und

Leipzig タイトル: Qualitativ-rekonstruktive Unterrichtsforschung in Leipzig

Jugyo Kenkyu in Hiroshima

参加者:Mamadou Mbaye, Karla Spendrin, Maria Hallitzky, Christian Herfter,
Johanna Leicht, 吉田成章, 松田充, 宮本勇一, 安藤和久, 阿蘇真早子

○2021年6月10日, シンポジウム・セミナー@広島大学・ライプツィヒ大学(オンライン)

・2021年6月10日 16:30-18:00 セミナー

タイトル:第80回定例オンラインセミナー「授業研究を軸に教師教育を変革する(7)―ドイツにおける
授業研究と教師教育

発表者: Maria Hallitzky, Emi Kinoshita, Christian Hefter, Karla Spendrin

・2021年6月10日 18:30-20:00

タイトル:HU-LU Agreement for Academic Cooperation 5th Anniversary Joint
Symposium

参加者:小山正孝, 丸山恭司, 松田充, 宮本勇一, 七木田敦, 岩田昌太郎, 松見法男, Simone
Reinhold, Barbara Drinck, Emi Kinoshita, Christian Hefter, Susanne
Viernickel, Katrin Liebers, Almut Krapt, Brigitte Latzko